

令和4年度 第1回学校評議員会 会議録

1 会議の名称

令和4年度岩手県立釜石高等学校 第1回学校評議員会

2 会議の構成

(1) 学校評議員

齊 藤 雅 彦（釜石中学校長）
武 田 直 美（同窓会副会長）
万城目 千佳代（前PTA会長）
新 里 進（株式会社浜千鳥代表取締役）
須 藤 寛 人（定時制教育振興会評議員）

(2) 学校職員

青 木 裕 信（校長）
山 影 稔 男（全日制副校長）
細 川 英 人（定時制副校長）
佐々木 重 子（事務長）
小 澤 光 悦（全日制総務主任）
似田貝 和 浩（全日制教務主任）
橋 本 博 幸（全日制進路指導主事）
湊 博 之（全日制生徒指導主事）
千 田 和 則（全日制SSH推進室・理数科主任）

3 会議の開催

令和4年6月30日（木） 15時30分～16時50分 [釜石高等学校 視聴覚室]
評議員5名、学校職員9名

4 会議の次第

授業見学

- (1) 開会
- (2) 校長挨拶
- (3) 全日制概況説明
- (4) 定時制概況説明
- (5) 質疑応答
- (6) その他
- (7) 閉会

5 会議の概要

(1) 質疑応答

- ・SSHについて。中学で総合的な学習の時間に取り組んでいると、各教科の基礎力の必要性を痛感することがしばしばあるが、このようにSSHに取り組んで、各教科の取り組みへの相乗効果のようなものはあるか。
→授業の場で、自分の意見を持ち、発表できる生徒が多いのは、SSHへの取り組みの効果かと思う。一つ付け加えると、大学の関係者から、本校卒業生はレポート等の出来映えが他の学生と違っていると、お褒めの言葉をいただくことがあるが、これもSSHの効果かと思われる。なお、県内、県外の他の高校の発表等を見る機会があるが、本校の生徒の取り組みは全国と比べて遜色のないものである。
- ・防災について。令和3年度学校評価アンケートで、「自分は学校で事故や事件、火災や地震が起こったときの行動を知っている」という質問に対する1年生の回答が2、3年生に比べて低いことについてはどのように考えているか。
→年2回の防災避難訓練を始め、防災についての啓発は行っている。もちろん小中学校でもさまざまな指導が行われてきたはずだが、昨年度の1学年へのアンケートで、「津波てんでんこ」ということばを知らないと回答した生徒が約半数いたのに驚かされたことがある。防災についての情報が定着していないのかもしれない、指導に工夫が必要と思われる。
- ・部活動について。生徒数の減少が続いていく中、今後の部活動のあり方について聞きたい。
→部活動のありかたについては、生徒もさることながら、職員数も減っており、今の部の数では対応できなくなっている。そのため、廃部基準を設け、基準を満たさない部については新入生の入部を停止し、在校生の引退の後、廃部という手続きを踏んでいる。

(2) 意見

- ・防災教育、復興教育について。もうすぐ震災の体験のない子供たちが中学に入ってくる。復興・防災教育のステージが変わる。今まで以上に小中高の継続、連携が必要になる。
- ・学校評価アンケートについて。生徒と保護者のギャップが大きいのがどこから来るのか気にかかった。また1年生のあいさつについての自己評価が低い、あいさつがきちんとできている環境かどうかは、いじめなどとも関連する。指導をお願いしたい。もう一つ、SSHでも部活動でもいいのだが、釜石高校の「売り」をもっと出していてもらいたい。
- ・PTA活動について。昨今のマスコミ報道等に見られるような、PTA活動に対

して批判的な風潮等も考慮して、あまり保護者に負担をかけないP T A活動を、という方向で動いているという学校側の説明があったが、確かに負担に感じることもある半面、それはそれで楽しいということもある。P T Aの活動が減る流れが、子どものことは学校任せというような雰囲気を生むことになったら、さびしい気がする。

- ・あいさつについて。円滑なコミュニケーションのために大切である。単なる習慣的なあいさつだけではなく、返事のしかたなど、ふだんの言葉のキャッチボールができる習慣をつけてほしい。大学生とのオンラインでのインターンシップで、対面のコミュニケーションの機会がほとんどない不安を訴えられている。できる時、できる場での指導をぜひお願いしたい。また、学校と地域企業との結びつきを強めてほしい。地域のいいところを知り、誇りを持てるような活動の機会を作ってほしい。
- ・産官学の連携について。S S Hで何かできないか。たとえばウニ殻、ホタテ殻の肥料化や柿の葉の成分を調べて何かに生かせないか、というように、地域に豊富にある物の活用など、地域に目を向けた活動を期待したい。

以上